Japanese Society of Pediatric Hematology/Oncology

小児がん　第41巻第1号：19-20，2004

総会記録

シンポジウム3

QOL向上を目指した看護と患者支援

藤井　裕治，浅見　恵子

小児がんの子どものQOL向上を目指した看護師を中心とした各施設での取り組みが報告された．

● 小児病棟における動物介在活動【病棟に犬がきたよ！】：聖路加国際病院の大野尚子さんは，人畜共通感染症，アレルギー，事故，社会認知等の問題を乗り越えて，病棟における動物介在活動を実現させ，入院中の子どもたちの心のケアに役立った経験を報告した．

● 痛みを伴う処置をうける子どもへのプレイセラピーを用いたストレス緩和について：神戸市立中央市民病院の田畑絵美さんは，人形を使って医療処置のごっこ遊びが，患児のストレス緩和に役立ち，プレパレーションになりうることを報告した．会場からは「誰がどのように行うのが適当か」で議論があった．またチャイルド・ライフ・スペシャリスト（CLS）からの意見もあった．

● 小児がん患者のQOL向上のための隔離基準緩和の試み：国立がんセンター中央病院の杉澤亜紀子さんは，がん専門病院の病棟全体を清潔区域として考え，白血球減少中の患児でも病棟内の行動制限をなくした結果，患児の精神的苦痛が軽減したことを報告した．隔離緩和に伴い重症感染症の発生の増加はないが，患児家族への指導や面会者の感染症チェックをより厳格にするなどの大切さも指摘した．会場からは専門病院と違い感染症患児が多く入院する一般病院では隔離基準の緩和は難しいとの意見もあった．

● 長期入院の子どもたちの日常生活の充実に向けて：東海大学医学部附属病院の加藤岡優子さんは，マンパワー不足ながらも，子どもたちの遊び心や学習意欲を満足させるために毎日の日課の工夫や季節ごとの行事や月ごとの誕生会そして院内学級を通して，入院生活を充実させる取り組みが報告された．

● 小児がんの子どもとその家族を支援するボランテイア団体-ファミリー・エージェンシーの紹介-：国立がんセンター中央病院の渡邊輝子さんは，1987年に設立されたボランティア団体の活動内容について報告した．この会は家族，医師，看護師等で構成され，主な活動はサマーキャンプとクリスマス会である．他施設から参加し同じ闘病生活をしている子どもたちやその家族との触れ合いは患児たちには闘病意欲の向上を，家族には情報交換の場の提供をもたらした．

● 小児がん看護におけるデスカンファランスの必要性と効果：国立がんセンター中央病院の永吉美智枝さんは，看護師の〔燃え尽き症候群〕を予防するために，死亡症例のデスカンファランスを行いその効果について報告した．個々の体験，感情を共有し，年齢や経験の異なる他の看護師の意見を聞くことにより個人のストレスの軽減に役立った．会場からは，医師や他職種のカンファへの参加や，終末期の患児の生前からのカンファの重要性が指摘された．

●「がんのこどものターミナルケア・トータルケア研究会」10年の歩み：静岡県立静岡がんセンターの天野功二さんは，1993年に静岡県の小児がん治療施設の医師，看護師により始まった研究会の変遷について報告した．回を重ねるごとに他の職

浜松医科大学　小児科（現　静岡県予防医学協会）
新潟県立がんセンター新潟病院　小児科

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of Pediatric Hematology/Oncology

種（臨床心理士，教育関係者等）や当事者（小児がん経験者やその家族）からの発表も増えて，他施設の医療者や当事者が同じ場所で議論する機会を持つことにより，ケアの質を客観的に評価しながらの全体的なトータルケアの向上が計られていた．さらに最近開設されたはホームページでは様々のケアのためのツールも紹介されている．

小児がんの子どもたちのQOLの向上のためには，日々の看護師の対応が重要である．しかし看護師だけでなく医師や家族さらには他職種（CLSや病棟保母や教師等）の皆で協力して行うことが必要である．今回の各施設のQOLの向上の試みの報告が先駆けとなり，日本全国のどの施設でもその施設に適した最善のケアが受けられるようになることを期待する．様々な治療プロトコールが統一され，全国どこでも同じような治療が施されるようになった現在，子どもたちのケアについても広く議論されることを期待したい．なお，本ディスカッションでは発表者の呼称をすべて「○○さん」で統一した．

NII-Electronic Library Service